

——助かったときはどのような状況ですか

その後、私の腰あたりまで水位が上がってきました。やがて、水位が下がり始めたときに保安隊（現在の陸上自衛隊）が救助を開始してくれただけで助かりました。



碓さんが助けられた徳田地域内の小高い丘、通称「しまで」は今も残っています。碓さんと赤井さんに案内していただき、当時の様子を伺いました。

——被災後はどのような生活でしたか

必死の思いで持ち出した米袋の中身が米ぬかでがっかりしたことを思い出します。炊き出しには助けられました。流れ込んだ泥や石の搬出、片付けなども地域内で助け合えたことが心の支えとなりました。その後、自宅のあった場所に応急住宅が建ち、生活が再建されました。



梶田 正造さん（市場）

見たこともない

有田川の姿

——当時の職業は

徳田にあった職場へ働きに出ており、18歳でした。

——当時のお住まいは

今も住んでいる市場です。

——水害に気付いたのはいつですか

前日の夜は友人と映画館に出掛け、帰宅した後は18日の朝まで熟睡していたため、親に起こされて初め

て気付きました。

——気付かれてからどのような行動をとられましたか

普段自宅から見えるはずのない有田川の流れが見えたときの驚きを今も覚えています。自宅には被害が及ばないことを確認し、鳥屋城小学校（現在の金屋庁舎がある場所）の校庭から対岸の徳田地区の様子を見に行きました。みるみるうちに校庭からでも手が届きそうな所まで水位が上がってきました。屋根に上って助けを求める人、流されていく家を目にしました。流された人が有田鉄道の本社建物や「しまで」と呼ばれる丘に流れ着いて助かるように願うことしかできませんでした。

——周辺での被害はどうでしたか

市場地区や近隣の地区では、被害が発生し、親戚の自宅も被災しました。そのため、復旧の手伝いにあちらこちらへ行きました。職場も流されており、そのあとしばらくは有田鉄道の線路復旧作業の仕事に就きました。当時は重機も十分になかったので、人力での復旧が中心でした。

——どの瞬間が印象に残っていますか

急に有田川の水位が下がり始めた際に、周りの人が「下流で堤防が決壊したからだ」と言ったときです。

さらに被害が出るのかと不安な思いを抱きました。



梶田さんが知人から譲り受けた写真。  
(写真左 = 有田川が氾濫した様子、写真右 = 有田鉄道本社周辺)